

だ、木曾八景の一つだからと云ふのではない、狭い谷の底、木曾川畔に延びた福島町は、高い西山に夕陽を遮られて、薄暗い靄の中にボンヤリと暮れて残つた雪のみが白く見える。

駒ヶ嶽の麓に、回らした塀の様に重なり合つた一連の柴山の枯れた頂を照した日が、すつと上に逸れて、西の空が黄金色に輝き始めると、低い峰が黒くなつて、駒ヶ嶽を照す日が益々赤くなつて来る。

中空八千尺の半から上は、雪計りて積上げたかと思はれる曖々たる巨峰が、西に向つて紅光を浴びた様、譬ふへきものを超脱してゐる、彼自身は太古より偉大なるものゝ一つだ。

巔の凍つた雪の面が、硝子板の様にキラ／＼と光る、全山一色の如く見えて、數知らぬ壁が現れ、前山が暗くなるに連れて、色ば眞紅になり、山が近くなつて大きく中空まで聳へた。

右の頂が左の凹部を薄暗くして、其後から輝く峰が顔を出し、中腹に起つた小さい凸出が、下からさす陽光を遮ぎつて、影の上に延ばして居る。始め一片の綿の様に、何か見えると思ふ間に、四方に延びて、帯の様に中腹に横ると、紫の影が雪に落ちて、闇は山の三分の一程まで迫つた。

雲が下に擴がつて麓を包む頃、夕陽は最後の一闪を頂に射て、頓に其所らが暗くなつた。

ア、と吾に返ると、持つた筆は凍り、手はこゝゑて、半成の畫面が闇に白い、寒風に襟を襲はれながら、三脚を提げた時、今一度駒ヶ嶽を見ると、餘れる光に、山は白く、暗藍の空に夢の

様、ホツと大息して下を見ると、電燈が赤く光つて居る。

冬の朝

鈴木月仙

先づ、思ふ通りの圖取りが済んだので、ヤマトを一本點けて、スーと深く吸ひ込みながら、出來た下圖と、對景とを見比べる。

小川に沿うた小さい藁屋の、やんわりと雪を頂いた具合、其向側からヒヨロ／＼と、小川の方に差し延べた梨の木、瘦枝の恰好、姉様被りの中から白い半面を見せて、何か洗物をしてゐた小娘の風姿……

冬の弱い日射が、漸くほんのりと、氣持よく暖くなつて來た。白牛の群れのやうに南から北に走つた連山は、淡いコバルトに霞んで、その南端の奥に高く群山を睥睨してゐる××山の頂は、ポーと深碧の空に消え入つてゐる小娘は頓て洗物を兩手に下げて、何も知らずに家に返つてゆく。鍋だか釜だか、ピカリと日光に反映した。ふくやかな手の甲は、冷たく眞紅になつてゐるだらう。メレンスか何かの紅い帶、紅い襟、その愛らしい後姿、何となく懐かしい心を唆つた。

つい先刻から梨の木に來て、小娘の顔をでも覗き込むやうに、小さい首をクリ／＼させてゐた鳥は、スィーと悠く飛んで、下方の小川に臨んだ白楊の木に移つた。

風の旅

神戸 津川 清平

郷里の風光案内にはあらねど、大和地方への極月の旅日記を水

繪化したるものなれば、拙文ながら目を通されよと言ふ。

時は嚴寒十二月、冷き風を外套の襟にて防ぎつゝ、心合へる友と二人して、朝の七時といふに電車に乗る、間も無く出入橋の終點に着く、空曇りて今にも泣き出しさうなる模様なり、網島まで徒歩して行き汽車に乗る、時に九時廿分なり、出入橋より約一時を費したるを以てその里程知らるべし、九時四十分にて網島を發すれば、住之道といふ驛には十時半に着きたり、汽車賃は十三錢にして、此處は人口約三百程の小村落なり、太鼓打ちつゝ廣告する人の、如何にも田舎なたるも面白く、スケツチに時を費して、草履を草鞋に改めて、八九丁もあらむか、布局大なる大坂平野を歩み行きて、生駒山麓に着す。

さるにても、吾々二人は是より山を越えて奈良に出てむとするなり、路は廣くして一丁毎に立て石あれば、樂に廿六七丁も登りたり、其處にて晝飯を終り、残り卅一丁を歩みて、山上の般若寺に着したるは午後の一時半なりし、奥の院は是非見るべきものと聞き及びしが見ざりし、されど途上の般若瀧といふを見たるが石の不動が水を浴びる様は一才面白く、なほツラ、の瀧が出来居るもなか／＼の奇觀なりし。此處より、奈良の若草山及び大佛の堂なども見え居れども、三里半と聽き驚きしが、勇を出だして下る、九丁にして山麓に着す、顧りみれば生駒の山々、馬糞紙色に枯れたるが、冬の空に横り、濃緑の松林色鮮なり。スケツチして猶も進みしに、三方に別れたる路あり、重れて行く人に告ぐ、「中の一線を東に取れ」と吾も困りたる一人なる

がやうやくに考へて進みたるなり、直に富雄川に出づ、上鳥見橋といふを渡りて、右に取りて下らば、田舎らしき風光面白き境に至るべし、或は土藏に入日の映じたる、或は小供等の夕日暖き庭に遊べる或は枯木の影の淡紫色に印せる或は立場茶屋の店先に荷車の牛の聲立て叫べる等、急がぬ旅ならば二三日は費してもと、名殘惜き街道をたどりて砂茶屋といふ小驛に出づ、其處より左に折れ、東へ／＼と進むに、喜光寺といふ堂左に見ゆ、由緒ある寺とはいへど其儘にして都跡村といふに入る、奈良までの里數を問はゞ一里と答ふるに、勢づきて、とぼ／＼と寒き風に吹かれつゝ歩む、西の京といふ塔を右に見て行く、垂仁帝の陵を見る、奈良の宿に着きたるは午後五時を過ぎたる頃なりき。

宿にては餅を春き居て、節面白く打つ音は、如何に旅の疲れを安ませしならむ、夜スケツチブック持ちて外に出づ、折りしも十三夜の月亘えて、猿澤池畔獨り塔の陰暗し、時に靜肅の夜の音を破るは一正の鹿なり、それより春日神社一の鳥居あたり迄行き見るに、足元あぶな氣なる鹿、吾等二人を見て逃ぐるも興あることなり、明日は櫻井まで八里の路を歩かざるべからざればとて、夜の九時頃寢に就く、女の聲して琵琶歌叫ぶも哀れなり。

二

翌廿六日、宿を朝鳥と共に立ちて、南圓堂に至る、吾が持くる三脚を見て、一人の僧語りて曰く、「盛夏の候此の堂の中に佛像をスケツチし繪端書を買ひて立ち去りし人あり」とて、詳し

く案内の勞を取られたり、博物館への途上、古瓦を數多拾ひて友と共に競ふ、場より出でて大佛に入る、それより二月堂に至り晝飯を終る、春日神社もそこ／＼に、櫻井向かつて發足す猿澤池の畔より南へ初瀬街道を歩む、「おびとけ」「櫟本」を過ぎて猶も進みたるに、明月東の山に明るく遠山はパアブル色に霞み村の白壁のみ、際立ちて白く見えたり、枯木の細々と立てるも哀れに淋く、かう／＼と散る落葉にも旅の淋さを感じたり、坂の路は農家の屋根にて絶え寒き風耳を切りて水田の中に光る月も、物亘えたる一幅の好圖パノラマの如く右に開き、快哉の語にも淋の情を起さしめたり、「柳本」といふ村に入る、あたりは夕靄に包まれて、三輪町の燈火のみコパルト色の中に點々として見ゆ、三輪神社も見ずに町を過ぎ、橋際に休みたり、山の端の明月皎々として物凄く、水の音のみ響き渡れり……

櫻井の町に着きたるは夜の十一時頃にして、寢に就きたる後は何事もわからず。

三

目覺むれば日光高く上れるに驚き、直に多武峯五十町の坂路を登る、頂上に着きたるは十一時過ぎにして老杉森々たる中を出づれば朱塗りの樓門麗しく、皇后陛下も御臨幸せられしとか、二三日前には雪七八寸も積りたりといへば、その寒さ知らるべし、少時スケツチして晝飯を終り、畝傍へと立ち出でて下山す、山上よりの眺望、吉田氏の畫かれたる「峯の眺め」その儘にして、日數あらば畫きしにと、殘念がれども詮方なし、岡寺と

いふ名高き寺もその儘にして、檀原神宮を拜す、質素なる社内寂として音無し、途中或る村落の美しき構圖を見たれど、次の旅を期して進みたるなり、畝傍驛に着きたるは四時半にして、今列車の出でたる後と聽き、六時十分の下りに乗る、十五夜の月亘えて、はるか三笠山上に明るし、旅の疲れにうと／＼と眠れば、月はなほも窓外に高く、風の音のみ物凄し。(完)

——明治四十二年十二月廿七日記す

おのれの告白(上)

長谷川利行

一條の路にまばらな松林があつて家が二三軒、それへ雪が降つた丁度それが元旦であるこれで新年の雪と言ふ御題に叶つた歌でも詩でも文でも作れるわけである無論畫も描ける、おのれはそれを眺めて詩も作つた歌も文も作つた畫も描いた、と同時に文章家になり畫家となつた、とまたおのれは馬鹿々々しくなつた。文章家が何んだ、詩なり歌なり文なり作つてこのおのれを慰安せしめるのはどれほどのエナジーがあるか、先づかう反促した、するとおのれはどうしても自然畫の側にたちてゆくんだ、畫家——藝術家になるのは天職だと信じるやうになる、何んだかつくづく描いた新年の雪といふ御題その儘の水彩畫を見て一しほの快心を覺へた。

仰々しく以上の始末をならべたてるのは何の理由もない、歌も詩も文も作つたが描いた繪畫が痛切におのれに見えがしたのである。

おのれに元旦は年賀狀がまい込んだ、無慮八十枚のハガキは大